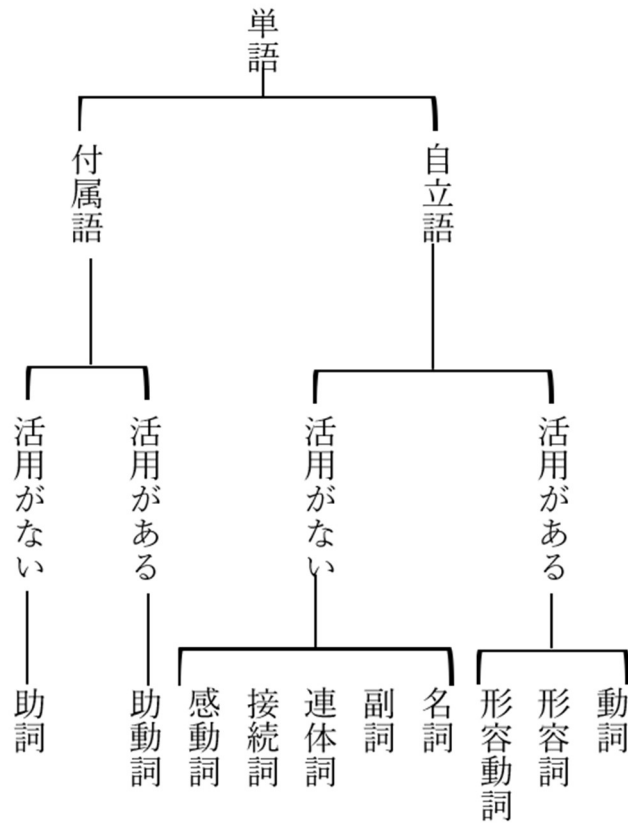




自立語

単独で文節を作ることができる。
必ず文節の最初にある。
一つの文節に自立語は必ず一つあり、
二つ以上はない。

付属語

それだけで文節を作ることができない。
常にほかの単語の後につく。
一つの文節に付属語がない場合や、二つ以上ある場合もある。

文節

意味が不自然にならない程度に文を区切ったときの最小の単位のこと。
※文節の切れ目には、「ネ」「ヨ」「サ」などを入れることができる。

品詞分解

『文章を分けることができないレベルまで分ける』ことを品詞分解という。

(例題)

京／に／入り立ち／て／うれし。

家に至りて、門に入るに、月明ければ、いとよくありさま見ゆ。

※複合語

単語にはいくつかの語が複合してできている語が存在する。

「山里」は、(山にある里)の意味だが、

一つで名詞と捉えるのが普通。

しかし、この語同士の結合の度合いは低いことがある。

「ものの心細し」という形容詞は、

「ものなむ心細くおぼゆる」などと利用され、

分離する事がある。

接続詞・連体詞の扱い

そのほとんどが他の品詞から転じてできたもの。

品詞としてはよわい。

「かかれば」

「かかり」(ラ変動詞已然形) + 「ば」

(助詞)

「かかれば」(接続詞)

「かくて」(接続詞・副詞)

多くの品詞にまたがる単語

「あはれ」(名詞・感動詞)

「みづから」(名詞・副詞)

「つれづれ」(名詞・形容動詞・副詞)

「すがら」(名詞・副詞・接尾辞)

「あまた」(副詞・連体詞・名詞)

「あたら・うたて・もとな」(連体詞・

副詞・感動詞)

活用形

咲く	基本形
咲	語幹
か	未然形
き	連用形
く	終止形
く	連体形
け	已然形
け	命令形

活用…『下の単語に合わせて変化する語尾』のこと

基本形…終止形と同じ。語幹…活用で変化しない部分。

未然形(ゝず)…『まだその動作をしていない』状態を表す。

連用形(ゝて)…基本的には用言に連なる形。助動詞や助詞につながることもある。

終止形(ゝ)。…文が終わって止まる形。

連体形(ゝとき)…体言(名詞)に連なる形。

※ 連体形の省略…『 連体形＋助詞 』という形の時に、体言が省略されることがある。

已然形（～ども）…『 すでにその動作が終わった 』状態を表す。（現代語においては仮定形。）

※ 花咲けば…現代語訳『 もし花が咲くなら 』

古 語訳『 花が咲くので 』

命令形（～せよ）…命令するときの形。

（例題）

あひ戦はむ心もなかりけり。 連用形 あしずりをして泣けども、 已然形

尻けよ。 命令形 深きゆゑあらむ。 未然形

石山へ参る。 終止形 静かなる暇なく 連体形

接辞

単独で用いることはなく、語に意味を付加する語。

単語とは異なるので注意が必要。

接続の度合いも低く、助詞などが間に挟まることもしばしば。

また、二種類以上を複合的に用いることもあるので注意。

主要な接頭辞

御 尊敬の意味を付加する。御几帳 小 小さいこと、かわいいことの意味を付加する。

み 美称の意味を付加する。み吉野 小百合

あひ 互いにある意味を付加する。あひおもふ うち ちよつとの意味を付加する。

た 手の意味を付加する。たぐる うちぞ泣かるる。(自然と少し泣かれる)

主要な接尾辞

めく へようになるの意味を付加する。

春めく (春らしくなる)

げ 様子を表す語に変化。

動きげ (動く様子)

さ 名詞化。

思はずさ (思いがけなさ)

ざま 様子を表す語に変化。

里へざま (里帰りのように)

たし 程度が甚だしいの意味を付加する。

らうたし (労たし↓労力が甚だしい↓労力が酷い)

ほど守ってやりたい↓かわいい)

ぶる へのように見せる。

ひたぶる (実直な様子)

ども 複数形化。こども (子たち)

動詞基礎

動詞の活用

動詞には全部で九種類の活用がある。

四段活用

上一・二段活用

下一・二段活用

カ・サ・ナ・ラ行変格活用

終止形はすべてウ段音になっている。※ラ変のみ「リ」

活用の表し方

○行○段活用動詞 ○○○形

○行変格活用動詞 ○○○形

動詞の判別順序

① 変格・上一・下一

② 文中での活用を確認

a 音…四段活用

i 音…四段・上一・二段活用

e 音…四段・下一・二段活用

③ 「ず」をつけてどの音になるか？

※ 必ず訳して意味を確認すること！



四段活用動詞

咲く	基本形
咲	語幹
か	未然形
き	連用形
く	終止形
く	連体形
け	已然形
け	命令形

打消の助動詞の「ず」を付けた時必ずア段音となる。

ア・ザ・ダ・ナ・ヤ・ワ行の語には四段活用の語が存在しない。

※「書く」↓「書かない」とするとき。

書かず↓『書かない』↓『書く』

書けず↓『書けない』↓『書くことができる』

つまり、古典語において可能の意味を含んだ語「読める」などは存在しない。

可能動詞

「読める」↓「読むことができる」このように分けられるものが可能動詞。

「染める」↓「染めることができる」とはならない。

上二段活用動詞

老ゆ	基本形
老	語幹
い	未然形
い	連用形
ゆ	終止形
ゆる	連体形
ゆれ	已然形
いよ	命令形

打消の助動詞の「ず」を付けた時必ずイ段音となる。

ヤ行上二段に注意！『老ゆ』『悔ゆ』『報ゆ』

下二段活用動詞

得	基本形
(得)	語幹
え	未然形
え	連用形
う	終止形
うる	連体形
うれ	已然形
えよ	命令形

打消の助動詞の「ず」を付けた時必ずエ段音となる。

ワ行下二段に注意！ 『植う』 『飢う』 『据う』

語幹活用動詞に注意！ 『得』 『経』 『寝』

※ 「寝」は「寝ぬ（いぬ）」という似た語が存在。（ナ下二）

ア行下二段に注意！ 『得』 『心得』 『所得』

下二段活用動詞

蹴る	基本形
（蹴）	語幹
け	未然形
け	連用形
ける	終止形
ける	連体形
けれ	已然形
けよ	命令形

「蹴る」この一語のみ。

上二段活用動詞

射る	基本形
(射)	語幹
い	未然形
い	連用形
いる	終止形
いる	連体形
いれ	已然形
いよ	命令形

所属語

み	に	き	い	ひ
マ行	ナ行	カ行	ヤ行	ハ行
見る	似る	着る	射る	干る
↓				
見ゆ	煮る		鑄る	沃る
(ヤ行下二段)に注意!				

る	+	ゐ
↑覚え方		
ワ行『		
居る		
』		
『		
率る		
』		

複合語の「後見る」「率ゐる」「用ゐる」「試みる」など…最低これは覚える。

正格活用まとめ

活用	四段	上二段	下二段	上二段	下一段
未然形	a	i	e	i	e
連用形	i	i	e	i	e
終止形	u	u	u	ゐる	e る
連体形	u	うる	うる	ゐる	e る
已然形	e	うれ	うれ	いれ	e れ
命令形	e	いよ	e よ	いよ	e よ

力行変格活用動詞

来	基本形
(来)	語幹
こ	未然形
き	連用形
く	終止形
くる	連体形
くれ	已然形
こよ こ	命令形

所属語は『 来 』のみ。

複合語である『 持て来 』『 まうで来 』『 参り来 』『 移動＋来 』などに注意。

意味が同じであるが、活用が異なる種類の動詞に『 来る (きたる) 』がある。

これはラ行四段活用動詞なので注意。

サ行変格活用動詞

す	基本形
(す)	語幹
せ	未然形
し	連用形
す	終止形
する	連体形
すれ	已然形
せよ	命令形

所属語は『す』『おはす』のみ。

複合語がたくさんあるので注意。主に漢語。

漢語名詞	
和語名詞	+
用言	す 「愛す」「かなしうす」

活用が異なる種類の動詞に『なす』がある。

これはサ行四段活用動詞なので注意。

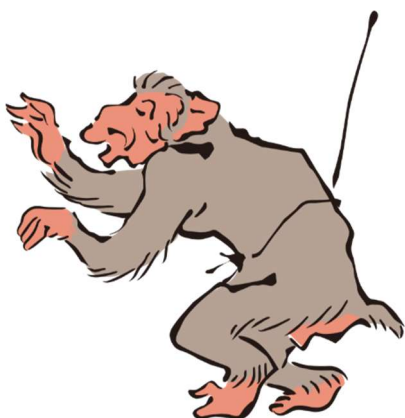
ナ行変格活用動詞

死ぬ	基本形
死	語幹
な	未然形
に	連用形
ぬ	終止形
ぬる	連体形
ぬれ	已然形
ね	命令形

所属語は『死ぬ』『往ぬ(去ぬ)』のみ。

意味が同じであるが、活用が異なる種類の動詞に『死す』がある。

これはサ行変格活用動詞なので注意。



ラ行変格活用動詞

あり	基本形
あ	語幹
ら	未然形
り	連用形
り	終止形
る	連体形
れ	已然形
れ	命令形

所属語は『あり』『をり』『はべり』『いまそがり』のみ。

複合語の『かかり』『さり』『しかり』に注意。

さらに、これらは他の語と連結して別の品詞になる場合がある。

かかる…（連体詞）このような

かかれば…（接続詞）こうなので・だから

動詞応用

動詞の自他

自動詞と他動詞は古代語において区別があるものとなないものがある。

中でも区別があるのは、活用と語尾の派生で分けることができる。

活用での区別

多いのは、「四段↓自動詞・下二段↓他動詞」という形。（絶対じゃない）

「染む」↓「染まず」（染まる・自） 「染めず」（染める・他動詞）

※例外も多くあるので、活用が二種類以上考えられる語については、

自他の違いがある可能性に留意して解く程度の認識が良い。

自動詞・他動詞

動作・作用を主体者自身の働きとして表現するものが**自動詞**。

主体から他に及ぶ働きとして表現する動詞が**他動詞**。

語尾の派生によって区別

「る」は自動詞語尾

「す」は他動詞語尾

であることが多い。

最終的には二種類の語を、

「くを○○する」なのか「くが○○する」なのかを訳して考える。

注意すべき動詞

自四―他下二型…臥す・入る・聞く・従ふ・沈む
自下二―他四型…切る・砕く・欠く

くを＋自動詞

現代語にはほぼ存在しないが、目的語をとっているように見える自動詞も存在する。

よだれをたれる

これは現代語にもみられる例だが、古語では次のようなものもある。

あふと見る夢をさめつる

悔しさに

こういった場合助詞「を」の訳は臨機応変に行うべきである。

動詞化という現象

古代語では、別の品詞を動詞化することができる。

『**が**る』(四段) あわれがる・めでたがる

む(下二段) 痛む

さぶ(上二段) 山さぶ・茂みさぶ

『**め**かす』(四段) 仄めかす・人めかす

だつ(四段) あやにくだつ・心だつ

『**め**く』(四段) 今めく・煌めく

ばむ(四段) けしきばむ・よしばむ

やぐ(四段) 華やぐ・若やぐ

『**ふ**』(上二段) あはれふ・さとふ

『**か**す』(四段) まどはかす・はしらかす

む(四段) あはれむ・赤む

※他動詞的意味の強調をする。

動詞の強調

動詞を強調する形には、次のような形がある。

① (「ただ」 + 動詞 + 「に」 (+ 助詞) + 動詞

※ 否定形は、動詞 + 「に」 + 「だに」 + 動詞 + 「ず」

② 動詞 + 「と」 + 動詞

※ 強調の内容的に「皆(すべての)」と訳すこともある。

③ 動詞 + 「し」 + 動詞 + 「ば」

(うゑしうゑば秋なき時や咲かざらむ花こそ散らめ根さへ枯れめや (古今)

同族目的語

本来、自動詞であるものが、その動詞と語源的・意味的に重複する目的語をとることがある。強調表現の一種である。

家思ふと眠を寝ず居れば (万 4400)

代動詞

古文にも、代動詞、英語で言う DO が存在する。

古文では、『**ものす**』もしくは「**す**」が用いられる。

走り井にて、破子などものすとて（蜻蛉）（破子…弁当などの容器）

この例文の「ものす」は「食べる」の意味だと文意で読み取れる。

「ものす」は「ものし給ふ」の形で、

「あり」の尊敬語として用いられることもある。

※ また、例外的な話ではあるが、「す」の代用として「**あり**」を用いることもある。

補助動詞

本来の実質的意味を失ったものを補助動詞という。

補助動詞になるのは、次のパターン。

- ① 動詞について敬意を表すもの
- ② 形容詞「べし」「ず」の下につく「あり」
- ③ 助詞を介して動詞の下につく「す」
- ④ 「て」「つつ」を介して動詞の下につく「あり」
- ⑤ 「て」を介して動詞の下につく「みる」

形容詞・形容動詞・音便

形容詞

高し		基本形
高		語幹
から	く	未然形
かり	く	連用形
○	し	終止形
かる	き	連体形
○	けれ	已然形
かれ	○	命令形

美し		基本形
美		語幹
しから	しく	未然形
しかり	しく	連用形
○	し	終止形
しかる	しき	連体形
○	しけれ	已然形
しかれ	○	命令形

ク・シク活用

この二つの見分けに
関しては、基本的に
「なる」をつけられ
わかる。

「くなる」

↓ク活用

「しくなる」

↓シク活用

(例)

高くなる

美しくなる

美くなる…×

形容詞とは

形容詞とは、『 物事の状態や性質を表現するもの 』である。

これは、『 人の主観 』によって変化するものである。

活用

① 本活用…『 下に助動詞が接続できない 』

〔断定「なり」だけは本活用に付く↓「高きなり」「美しきなり」〕

② 補助活用…断定「なり」以外の助動詞がカリ活用に付く（カリ活用の下にあるのは普通の助動詞）

形容詞の仮定用法

通常、未然形＋ば が仮定条件の書き方。（花咲かば）

形容詞の場合、

『 くは・くくば・くくんば 』が仮定（訳）もしくならば・もしくかったら

（例）恋しくは 来てみよかし ちはやぶる 神のいさむる 道ならなくに

『 もし恋しかつたら 』来てみなさいよ。神がとめる道ではないことなのに。

※「いみじくはあれども」（素晴らしくはあるけれど）のように仮定にならないこともある

形容動詞

堂々たり		基本形
堂々		語幹
	たら	未然形
と	たり	連用形
	たり	終止形
	たる	連体形
	たれ	已然形
	たれ	命令形

静かなり		基本形
静か		語幹
	なら	未然形
に	なり	連用形
	なり	終止形
	なる	連体形
	なれ	已然形
	なれ	命令形

形容動詞とは

形容動詞とは、形容詞と同様『 物事の状態や性質を表現するもの 』である。

何が異なるか？↓『 活用 』が異なる。（動詞とくつついたという認識で○）

―たり は 漢語 ＋ たり の形が多い。

接辞

次の接辞の際には形容動詞になるので注意したい。

『 げなり 』 『 やかなり 』 『 はかなり 』 『 らなり 』

※『 音読み漢字＋なり 』にも注意（「優なり」「急なり」「艶なり」など）

形容詞特殊用法

形容詞には特殊な用法がいくつかあるので注意。

- ① 『 **感動詞＋語幹（＋や）** 』で感動（語り手の実感）を表す

（感動詞：「あな」「ああ」「あら」等）

あなきたな（訳）『 **ああきたないなあ** 』

- ② 『 **語幹＋の＋体言** 』

感動（実感）を含みながら連体修飾する。

をかしの御髪や（訳）『 **綺麗な御髪なこと！** 』

（目の前にある髪の美しさを実感し、感嘆しながら発言している）

- ③ 『 **体言＋（を）＋語幹＋み** 』

原因理由を表し、『 **AがBなので** 』と訳す。（**を**は省略されることあり。）

野をなつかしみ（訳）『 **野が慕わしいので** 』

特殊形容詞

同じ		基本形
同		語幹
じから	じく	未然形
じかり	じく	連用形
○	じ	終止形
じかる	じ	連体形
○	じけれ	已然形
じかれ	○	命令形

接辞

次の接辞の際には、形容詞になり特定の意味を持つことがあるので注意したい。

『 じ 』 …「〜のようである」の意味を付加する。

『 なし 』 …程度がはなはだしいという意味を追加することがある。単に「無し」という意味で

はないことに注意。(例) うしろめたなし・むつくけなし・のがれがたなし